

沖代地区条里跡62次調査
宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

沖代地区条里跡 62 次調査

宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024
中津市教育委員会

2024
中津市教育委員会

序

大分県の最北部に位置する中津市は、国指定名勝耶馬溪や広大な沖代平野、中津干潟など豊かな自然に恵まれた地域に位置します。

この中津市域は古代には豊前国下毛郡に属しており、平野部では条里水田が行われ、相原廃寺などの寺院が建ち、台地上では下毛郡の正倉である長者屋敷官衙遺跡が見つかるなど、古代の様相を伝える遺跡が数多く残っております。中でも現在までにその景観を残す条里水田は、現在の生活の営みの中で徐々に失われつつありますが、その都度発掘調査を行い、多様な成果を上げてきたところです。

今回の条里水田の発掘調査では、北限地域周辺における条里開発の時期を考える上で貴重な調査となりました。この成果が今後の中津市域の歴史解明に寄与することになれば幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力賜りました株式会社R&F代表取締役小川隆司様をはじめ、調査に関わって下さいました方々に対し心から感謝申し上げます。

令和6年3月31日

中津市教育委員会
教育長 古口 宣久

例 言

1. 本書は大分県中津市教育委員会が令和4（2022）年度に実施した沖代地区条里跡62次調査の発掘調査報告書である。
2. 確認調査は浦井直幸が担当し、本調査は株式会社R&F代表取締役小川隆司氏より委託を受けた中津市教育委員会が行い、衛藤美紀が担当した。
3. 調査区に使用した座標は世界測地系第Ⅱ座標系に基づくものである。
4. 出土遺物の整理作業は、令和5（2023）年度に行った。
5. 遺物の洗浄・注記・実測・拓本・浄書・観察表作成等は整理作業員が行い、旧和田公民館にて保管している。
6. 本書に掲載した遺構の略称は土坑をSK、溝をSDと表記した。
7. 出土遺物については、吉田寛氏（大分県立埋蔵文化財センター職員）にご教示いただいた。
8. 本書の執筆・編集は衛藤が行った。

目 次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査体制	2
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3節 周辺の発掘調査事例	3
第3章 調査の成果	5
第1節 調査概要	5
第2節 基本層序	5
第3節 遺構と遺物	5
第4章 総括	10
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 調査区位置図	1
第2図 周辺の遺跡	4
第3図 確認調査概略図	5
第4図 遺構平面図	6
第5図 調査区東 平面・断面図	7
第6図 SK1、2 平面・土層断面図	8
第7図 出土遺物	9
第8図 一ツ松の地籍図（一部）	11

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧表	4
第2表 遺物観察表	12
第3表 遺構一覧表	12

写真図版目次

写真図版1 検出状況／完掘	13
写真図版2 SD1、2、3検出／SD1検出／柱穴検出／柱穴半截／SK完掘	14
写真図版3 SD1、2、3完掘／SD1、2東西ベルト	15
写真図版4 出土遺物	16

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

令和4年12月9日、中津市大字一ツ松字一松畑319番1の埋蔵文化財包蔵の照会がなされた。照会地は沖代地区条里跡である旨を回答し、同月26日、工事主体者より文化財保護法第93条第1項の届出が提出された。平面積約1,357㎡の水田を宅地造成するものであった。これを受け中津市教育委員会は翌年1月20日に確認調査を実施し、遺構・遺物を検出した。工事主体者へ工法変更による遺構の保存について協議し、土地の掘削を遺構面に及ばない深度で行う事となったが、遺構が密集して検出した位置指定道路の一部を対象として記録保存するための本調査を行うことが決定した。1月27日、工事主体者と中津市長名にて発掘調査委託契約等を締結し、2月6日から同月13日まで本調査を実施した。

調査の結果、出土遺物から中近世と推測する土坑や溝状遺構等を確認したため、遺構は縮尺1/20の全体図及び土層図を作成、写真はデジタルカメラにより撮影し記録保存した。令和5年度より報告書作業を開始し、令和6年3月の本書刊行をもって本事業を完了した。



第1図 調査区位置図 (S = 1/2,500)

第2節 調査の経過

令和5年2月6日	本調査開始、重機による表土剥ぎ
2月7日	遺構掘削開始、測量杭設置
2月8日	遺構全体図作成
2月9日	遺構完掘、完掘写真撮影
2月13日	図面終了、調査終了

第3節 調査体制

令和4（2022）年度

中津市教育委員会	教育長	栗田 英代
〃	教育次長	黒永 俊弘
〃	社会教育課長	瀬戸口千佳
〃	〃 歴史博物館長	高崎 章子
〃	〃 副館長兼主幹	花崎 徹
〃	〃 副主任研究員	浦井 直幸（確認調査担当）
〃	〃 主任	衛藤 美紀（本調査担当）

令和5（2023）年度

中津市教育委員会	教育長	古口 宣久
〃	教育次長	黒永 俊弘
〃	社会教育課長	瀬戸口千佳
〃	〃 歴史博物館長	河野さくら
〃	〃 副館長兼主幹	花崎 徹
〃	〃 主任	衛藤 美紀（整理担当）

令和4年度の発掘調査に従事した作業員は下記の通りである。（五十音順、敬称略）

衛藤敏章、神田哲夫、祐成本文、武吉香子、福成誠一

また令和5年度の整理作業及び報告書作成業務に従事した作業員は下記の通りである。

安倍方恵、穴井美保子、岩本敏美、衛藤京子、吉上かおり、久原彩、橋内順子

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

中津市は大分県の最北部に位置し、北は周防灘に面し、西は山国川を挟み福岡県、東は宇佐市、南は玖珠町・日田市と接する。英彦山に源流を持つ一級河川山国川が市内を南北に貫流し、流域一

帯を潤し周防灘に注ぐ。上中流域は山々に囲まれた地形で、頼山陽より「耶馬溪山天下に無し」と称された奇岩奇勝は、名勝耶馬溪として国の指定を受けている。下流域には下毛原台地と呼ばれる洪積台地と県下最大級の沖積平野である沖代平野が広がり、周防灘に瀬戸内海最大の干潟中津干潟を形成する。沖代平野は扇状地形を成し、三口を扇頂部（海拔20m）に沖積地河口部（海拔約2m）に向かい緩やかに傾斜する。平野内には山国川の旧河道の痕跡や自然堤防、微高地等が多数存在し、それら微高地上に集落遺跡が確認されている。

本調査地は沖代地区条里跡の北部に位置する、標高約4.300mにある水田である。明黄褐色砂層を遺構検出面とし、その直上に現代の水田層が堆積する。

第2節 歴史的環境

沖代地区条里跡は奈良時代に敷設された官道を南限に地割された条里の遺跡で、官道の沿線には長者屋敷官衙遺跡（古代下毛郡役所正倉：国指定史跡）をはじめ薦神社や相原庵寺など関連の古代遺跡及び寺院が多く残っている。北限は旧国道周辺と想定され、周辺には中近世の城館と伝わる周知遺跡が点在する。北限周辺には江戸時代の絵図『正保豊前国絵図 植木写本』をみると城下町から豊後へ向かう道が描かれており、嶋田から中殿、松（一ツ松）、合間（合馬）へ続く。このことから中世にも同様の道があったと推測され、城館が点在する理由に納得がいく。これらの城館は本調査地からみて北西に中臣城跡と石神城跡、北東に一ツ松城跡が位置する。中臣城跡は『豊前故城誌』によると「天平勝寶二年仲津郡中臣郷の人中臣今男國教此の所に來たりて城を築く」「城址群ならず今田の字にどうでん堀、城戸」と記載があり、石神城跡は『下毛郡誌』に「小畑四郎左衛門宗重の居城」とある。一ツ松城跡も『豊前故城誌』に記載があり、薦神社大宮司池永重澄の三男一松重郷が築いたとされる。これらの城館周辺は集落が形成されており、その集落外に在地土豪管轄の田畑が広がっていたと推測する。本調査地は一ツ松城跡の中心部から直線距離にして約300m離れた小字「一松畑」で、地区名を冠していることから周辺に一ツ松城主に関する田畑があったと思われる。

第3節 周辺の発掘調査事例

沖代地区条里跡はこれまでに各種開発工事に先立ち発掘調査が行われており、うち66か所で遺構または遺物が確認されているが、北限地域では遺構の発見例は少なく、本調査地から東へ250mに所在する小楠コミュニティセンターの発掘調査時に須恵器片や土師質土器片が出土した程度に留まる。このほか周辺遺跡の調査歴としては大分県立埋蔵文化財センターが都市計画道路外馬場錆矢堂線の改良工事で複数箇所調査を行っている。一ツ松城跡内の発掘調査では近世（江戸後期）と推定される溝や井戸・土坑などが確認されているが堀や土塁など城郭に関わる遺構は確認されていない。また調査地北西の濱田遺跡での調査では中近世の遺物を含む洪水層に覆われた中世の水田層が確認されている。



第2図 周辺の遺跡 (S = 1/50,000)

番号	遺跡名	所在地	時代	番号	遺跡名	所在地	時代
004	高畑遺跡	丸山町	縄文	029	梶屋遺跡	永添	弥生・古墳
005	豊田小学校校庭遺跡	鳥田	弥生・古墳	031	中原遺跡	大悟法・上如水	近世・中世
007	沖代地区桑里跡	中央町ほか	弥生・古墳・古代・中世・近世	039	福永城跡	相原	中世
008	中臣城跡	中殿	中世	040	市場遺跡	湯屋	古墳・中世
009	石神城跡	牛神	中世	041	三口遺跡	相原・湯屋	弥生・古墳・古代
010	一ツ松城跡	一ツ松	中世	042	相原廃寺	相原	古代
011	鴻の巣城跡	下池永	中世	043	法華寺城跡	相原	中世
012	亀山古墳	下池永	古墳	045	永添中國遺跡	永添	弥生・古墳
013	合馬遺跡	合馬	古墳・中世	047	東ノ浦遺跡	永添	古墳
022	上万田遺跡	万田	弥生・古墳・中世	121	大道端遺跡	下池永	中世・古墳
023	河原田城跡	万田	中世	124	東浦遺跡	永添	古墳
024	沖代小学校校庭遺跡	沖代町	弥生	127	石堂池遺跡	下池永	古墳・中世
025	下池永遺跡	下池永	弥生・古墳・中世	136	池永城跡	上池永	中世
026	上池永遺跡	上池永	弥生・古墳	138	古代豊前道跡	伊藤田・福島ほか	古代
027	末広城跡	永添	中世	147	東浜遺跡	東浜	古墳・中世
028	西永添遺跡	永添	弥生・古墳	289	上池永矢筈遺跡	上池永	中世
				303	濱田遺跡	牛神	中世

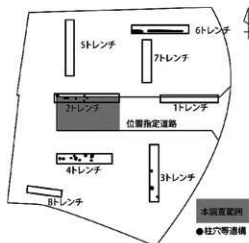
第1表 周辺の遺跡一覧表

第3章 調査の成果

第1節 調査概要

確認調査は8本のトレンチを設定し実施した。その結果、4本のトレンチで地表面から20～30cm下で柱穴、溝状遺構を確認し、石臼や中世の瓦質土器等が出土した。

工法変更の協議を経て、本調査は位置指定道路範囲の一部約64㎡を対象とし、重機による掘り下げを行い、柱穴24基・土坑4基・溝状遺構3条を検出した。遺物は土師質土器や磁器など整理箱1箱分が出土している。



第3図 確認調査概略図（縮尺不同）

第2節 基本層序

基本層序は現水田層（黒褐色土Hue2.5Y3/1：層厚20～30cm）下に明黄褐色砂質土（2.5Y6/6）の遺構検出面となるが、調査区の南側半分は山国川の氾濫に伴うと考えられる旧河道であり遺構検出面は確認できていない。旧河道にサブトレンチを入れ30cmほど掘り下げたところ湧水したため、旧河道内での掘り下げは中止した。遺構埋土が土層中に確認できないことから削平を受けていると推測でき、遺構検出面を5cm程度掘り下げると小礫層となる。調査では遺構検出面より下層は確認していないが、地元住民の方によると地表面より1m下から貝殻が出るとの情報提供があった。

第3節 遺構と遺物

柱穴（第4図）

旧河道上も含め24基を検出したが、遺物の出土はない。遺構埋土は基本的には暗褐色砂質土（10YR3/3）の単層で、遺構検出面の小礫層まで掘り込んでいるため壁や床面に小礫を含むが、埋土からは小礫は検出していない。本調査範囲内では建物の復元には至らなかった。

土坑

SK1（第6図）

調査区の中央部で検出した南北方向に長い土坑と推測した遺構である。SK3を切り、南側は旧河道上に広がり明確に検出はできなかった。深さは検出面から0.16mで埋土は暗オリーブ褐色土の単層、3～10cm程度の礫が多く混じる。出土遺物は第7図1から6である。1から5は瓦質土器で、1は鍋、2は火消壺、3も火消壺または火鉢、4は掘鉢、5は甕と思われる。1は外面にススが付着しており、4も被熱により外面が剥落している。6は器種類不明であるが、瓦質で外面に模様が施されている。どれも小片のため年代の特定には至らなかった。



第4図 遺構平面図 (S = 1/60)

SK2、SK4（第5図）

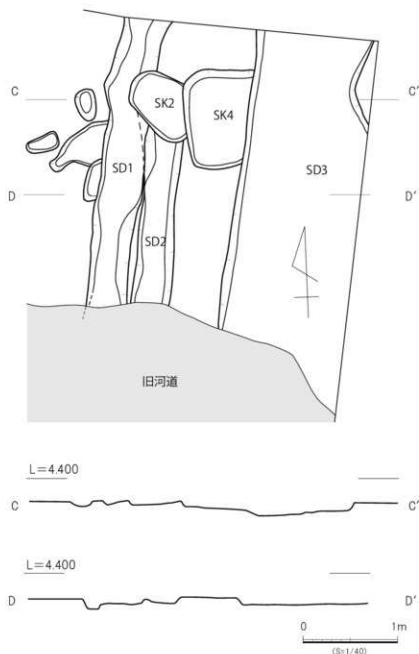
調査区東側で検出した楕円の形をした土坑で、SD1と2を切る。検出面から底面まで0.08mと浅く、埋土は暗褐色砂質土であった。遺物は第7図7の土師質土器の鉢で内面にミガキが施される。また東隅を四角形の土坑SK4に切られる。SK4の埋土は砂と礫で遺物の出土は確認していない。

SK3（第6図）

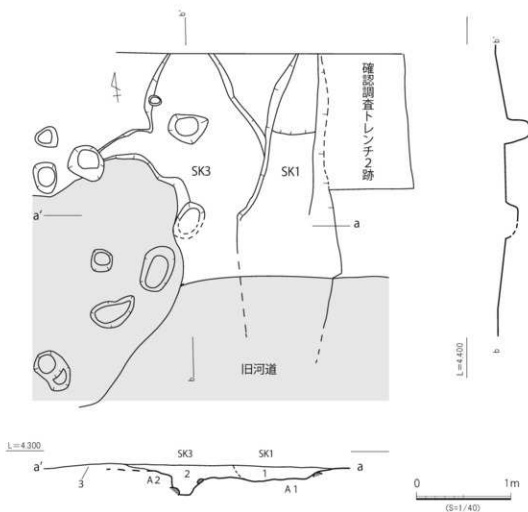
調査区中央部で検出した不定形な土坑である。埋土はSK1と同じ暗オリーブ褐色土の単層で検出面より0.14m下で床面を確認した。SK3内の柱穴は床面検出後、確認したものである。SK3の床面（地山：礫層）は礫が少なく、ややしまりがあるものの掘り下げられることに対してSK1の床面は固くしまっていた。

出土遺物は第7図8から11

までである。8・9は瓦質土器で、8は鍋、9は浅鉢の胴部と推測する。どちらも外面にススが付着する。10は土師質土器の浅鉢で胎土が粗い。11は手づくねの土錘である。



第5図 調査区東 平面・断面図（S = 1/40）



- 1: 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) 3~10cmの小礫が多く混じる。SK1埋土。
 2: 1と同じ。礫が混じらない。SK3の埋土。
 3: 旧河道の堆積層。砂と小礫からなる。
 A1: 遺構検出面。明黄褐色砂質土 (2.5Y6/6) 3~5cmの小礫が混じり固くしめる。
 A2: 遺構検出面。明黄褐色砂質土 (2.5Y6/6) 礫が抜かれている。やしまりあり。

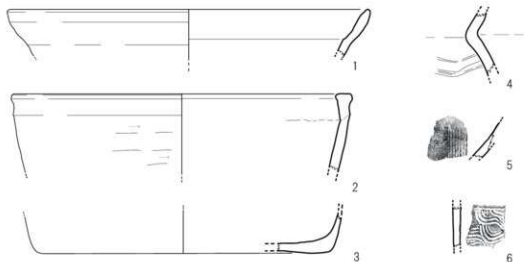
第6図 SK1、2 平面・土層断面図 (S = 1/40)

溝状遺構

SD1 (第5図)

調査区東側で検出した溝である。3本の溝が平行して南北方向に延びている。SD1はそのうち最も西側のものでSD2と接し一部切られる。最大幅0.6m、検出面からの深さ0.08mで、南北端の底面の高低差はほとんどない。旧河道上では確認できなかったが、延長線上の南壁土層に断面を確認した。現水田層直下で検出し、埋土は暗オリーブ褐色砂質土 (2.5Y3/3) の単層、層上部にはマンガン・鉄分が沈着している。遺物は出土していない。

SK1



SK2



SK3



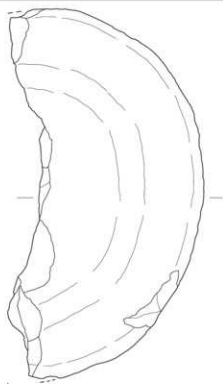
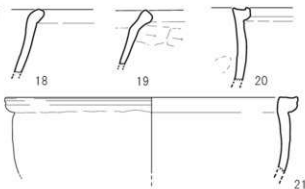
SD3



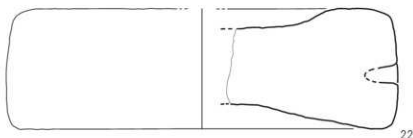
検出



一括



0 10cm
(S=1/3)



第7図 出土遺物

SD2 (第5図)

調査区東側で検出した溝で、北端をSK2に切られる。最大幅0.4m、検出面からの深さ0.13mで南北端の底面の高低差はほとんどない。埋土はSD1と同じ暗オリーブ褐色砂質土の単層で遺物の出土はない。

SD3 (第5図)

調査区東側で検出した溝とした遺構であるが、調査区外に広がるため別遺構の可能性もある。暗オリーブ褐色砂質土の埋土を取り除くと礫層(旧河道)となった。出土遺物は第7図12から14である。12は染付碗で外面に菊の文花が描かれる1810年代のもの。13は龍泉窯の青磁碗、14は瀬戸美濃の灰釉皿である。

その他の遺物

第7図15から17は表土剥ぎ後の遺構検出時に発見したものである。15は旧河道上で検出した焼き締め陶器の罎鉢で外面には指頭圧痕が残る。16はSK2上で検出した染付碗で18世紀後半のもの。17も旧河道上で検出した瓦質土器の壺と推測する。18から22は確認調査で採取したものである。18、19は瓦質土器の鉢と鍋である。18は口縁部に面取りを施し、19は口縁部を平らに成形される。20、21はどちらも土師質土器の鉢で作りが粗く、同一個体と思われる。22は安山岩製の石臼(上臼)である。わずかに描目が残っているが描面の大部分は欠損している。側面には取っ手の差込穴がある。

第4章 総括

今回の調査で確認した遺構は基本的に南北方向に軸が認められ、調査区内で確認した旧河道とは直交し、旧河道上に広がりを見せる。調査区東側の溝と推測した3つの遺構は埋土が同じであること、軸が同じであることから同時期(19世紀代)のものと考え。明治期の地籍図(第8図)を見ると、本調査地は南北に長い水田が3枚並んでいたことが確認できる(調査前は1枚であった)。埋土にマンガン及び鉄分が沈着していることからSD3は水田跡、SD1、2は水田に付属する溝であった可能性も考えられる。ただしSD3は底面より多量の礫が検出しており、水田として利用できたのかは疑問である。対して調査区西側の土坑と推測した2つの遺構(SK1、3)もSD3条と似た埋土であるがマンガン等の沈着は確認できなかった。遺物は中世と推測する瓦質土器や土師質土器の小片のみで陶磁器は出土しないことからSDより古い時期のものだろうか。また床面より礫が検出するがSK3は明らかに礫を取り除いており、SK1についても床面を固くしめる等SDとは違う様相を見せた。

本調査地は現水田層直下に礫混じりの遺構検出面または旧河道があり、耕作には不向きな土地と言える。近隣の調査成果をみると古代の遺構は確認されておらず、本調査地周辺の水田開発は中世に入ってから、または中世以前の痕跡は山国川の氾濫で消失したと推測できる。後者の場合は本調

査で遺構検出面とした地層は中世以降の整地層ということになる。令和5年に本調査地から市道を挟んだ東側の田地で確認調査を実施したが、現地表面から20～40cm下で本調査地と同様な黄褐色土の遺構検出面を確認した。当該地では約1,900㎡のうち64㎡を調査したが旧河道の痕跡は確認できなかった。

本調査は、調査歴の少ない沖代条里の北限地周辺での発掘調査であり、北限地周辺の条里開発の時期・過程について考える上で貴重な成果となった。

参考文献

大分県立歴史博物館 2021『沖代条里の調査 本編』



第8図 一ツ松の地籍図（一部）

掲載 番号	出土 遺構	種別	器種	法量 (cm)			残存率	調整/文様	焼成	胎土	色調/ 絵付釉薬	備考
				器高	口径	底径						
1	SK1	瓦質 土器	鍋	(3.7+α)	(28.4)		小片	口縁部:ヨコナデ 内外面:ナデ	良好	角閃石・多く含む 白色粒子・少量	内面:灰色 外面:黒色	反転還元 成形:ロク口 外面にスス付着
2	SK1	瓦質 土器	火消 壺か	(6.2+α)	(26.6)		小片	口縁部:ヨコナデ 内面:ナデ 外面:ヘラケズリ	良好	角閃石、赤色粒子、 白色粒子・少量	灰色	成形:ロク口
3	SK1	瓦質 土器	火鉢か 火消壺	(2.7+α)		(22.4)	小片	内面:底部:ナデ 外面:平滑なナデ	良好	角閃石、赤色粒子・少量	内面:薄灰色 外面:薄い青色	反転還元 成形:ロク口
4	SK1	瓦質 土器	壺	—			小片	内面:上部ナデ、工具など によるナデ 外面:ナデ	良好	石英、角閃石・多量 白色粒子・少量	橙灰色	
5	SK1	瓦質 土器	罐鉢	—			小片	内面:磨目 外面:風化による剥落により不明	良好	角閃石、白色粒子、 赤色粒子・少量	内面:黒色 外面:灰色	被熱により 外面剥落
6	SK1	瓦質	不明	—			小片	内面:ナデ	良好	石英、角閃石、長石・少量	青灰色	
7	SK2	土師質 土器	鉢 (底部)	(1.8)			小片	内面:ミガキ 底部:ナデ	良好	赤色粒子・多量 石英、長石、角閃石、白色粒子・少量	黄褐色	
8	SK3	瓦質 土器	鍋	(5.0+α)			小片	口縁部:ヨコナデ 内面:ナデ 外面:ヘラケズリ、ナデ	良好	白色粒子、角閃石・少量	内面:灰褐色 外面:灰色	外面にスス 付着
9	SK3	瓦質 土器	浅鉢か	—			小片	内面:ナデ 外面:ヘラケズリ	良好	白色粒子、黒色粒子、角閃 石・少量	灰色	外面にスス 付着
10	SK3	土師質	浅鉢	(1.6+α)			小片	ナデ	良好	0.5mm大の白色粒子 0.1mm大の角閃石	灰褐色	
11	SK3	土製品	土鍾	長さ 4.5	幅 1.1	重さ 6g	95%		良好	白色粒子、角閃石・少量	黄褐色	成形:手づくね
12	SD3	磁器	染付碗	(1.9+α)			小片	菊の文花				成形:ロク口 1810年代頃
13	SD3	青磁	碗	(1.6+α)			小片					成形:ロク口 龍泉窯
14	SD3	陶器	皿	—			小片	なし			灰釉	瀬戸美濃
15	映出 1	焼き締 め陶器	罐鉢	—			小片	内面:磨目 外面:指頭圧痕	良好		灰褐色	
16	映出 4	磁器	染付碗	—			小片					肥前 18世紀後半
17	映出 6	瓦質 土器	壺か	(4.2+α)			小片	ナデ	良好	角閃石・中量 白色粒子・ 少量 雲母微粒子	灰褐色	
18	一括	瓦質 土器	鉢	(5.0+α)			小片	口縁部:ヨコナデ 内面:ナデ 外面:ケズリのちナデ	良好	角閃石、石英・中量 長石・少量	灰褐色	
19	一括	瓦質 土器	鍋	(4.3+α)			小片	内面:ナデ 外面:ヘラケズリ	良好	石英・多量 角閃石、長石・中量	内面:灰褐色 外面:黄灰色	
20	一括	土師質 土器	鉢	(5.8+α)			小片	ナデ 内面に指頭圧痕あり	良好	石英・多量 角閃石・中量 長石・少量	黄褐色	
21	一括	土師質 土器	鉢	(6.2+α)	(23.3)		ナデ		良好	角閃石、石英、長石・少量	橙色	反転還元 成形:ロク口
22	一括	石製品	石臼	直径 (31.0)	高さ 9.5	重さ 4,818g						反転還元 安山岩

第2表 遺物観察表

遺構 番号	種別	規模 (m)				遺物	時期	備考
		最大長軸	最大短軸	検出標高 (最高値)	底面標高 (最低値)			
SK1	土坑	(2.35+α)	(1.1+α)	4.146	3.982	瓦質土器		
SK2	土坑	(0.85)	(0.6)	4.155	4.080	土師質土器		SK4に切られる
SK3	土坑	(2.4+α)	(1.75+α)	4.146	4.000	瓦質土器、土師質土器、土鍾		SK1に切られる
SK4	土坑	(1.05+α)	(0.7+α)	4.160	4.055	—		SD3に切られる
SD1	溝	(3.1+α)	0.6	4.172	4.064	—		SK1、SD2に切られる
SD2	溝	(1.9+α)	0.4	4.175	4.045	—		SK1に切られる
SD3	溝	(1.3+α)	(3.9+α)	4.172	3.986	染付碗、青磁碗、陶器皿	19世紀	

第3表 遺構一覧表



検出状況（東から撮影）



完掘（東から撮影）



SD1、2、3 検出



SD1 検出



柱穴検出



柱穴半截



SK 完掘 (北から撮影)



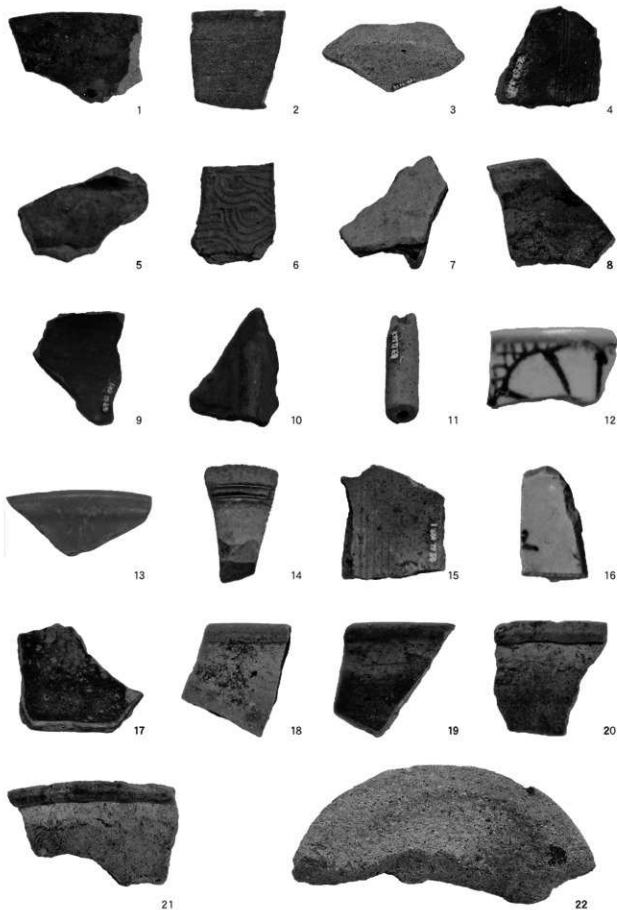
柱穴半截



SD1、2、3 完掘（南から撮影）



SD1、2 東西ベルト（南から撮影）



出土遺物

報 告 書 抄 錄

書 名	おきだいち くじょうり ぶん じちょうき 沖代地区条里跡62次調査							
副 書 名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ーズ 名	中津市文化財調査報告							
シリーズ番号	第119集							
編 集 者 名	衛藤 美紀							
編 集 機 関	中津市教育委員会							
所 在 地	〒871-0058 大分県中津市豊田町9番地10 TEL 0979-22-4942							
発 行 年 月 日	2024年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面 積	調査原因
おきだいち ちくじょうり ぶん 沖代地区条里跡	おきだいち ちくじょうり ぶん 大分県中津市大字一ツ松字 一松319番1	44203	203007	33° 35' 35.5"	131° 12' 14"	20230206 ～ 20230213	64㎡	宅地造成
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
沖代地区条里跡	条里跡	弥生・古墳・古代・ 中世・近世	柱穴、土坑、 溝	土師質土器、 瓦質土器、陶磁器				
要 約	沖代地区条里跡の北限地域周辺での発掘調査で、中近世の土坑、溝等を確認した。							

沖代地区条里跡62次調査

宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中津市文化財調査報告 第119集

2024年3月31日

発行 中津市教育委員会
印刷 藤川原田印刷社